

# 春燈

8  
月号

AUGUST 2007



久保田万太郎の句

れつてるの濡れてはがれしラムネかな

『青みどろ』昭和十一〜十三年作

この句の誕生からおよそ十年ぐらい後の話になる。夏場になると、瓜やトマトは井戸に浮かべて冷やした。学校の帰り道、古い大きな井戸の水を分け合って飲んだあの美味しさは何だったのだろうか。今の、冷蔵庫で冷やした水の喉を刺すような冷たさとは何かが違う。レットルが、触れば剥がれるくらいに氷水に浸かっていたラムネは、ちょうど良い冷え具合なのだ。

乗鞍三彦

久保田万太郎の句

奉公にゆく誰彼や海嬴廻し

句集『草の丈』明治四十二年作

明治・大正・昭和に比べればずっと廃たれてしまった「べいごま」。男子の遊び、海海嬴と言う貝の殻に鉛をつめ込み独楽にして、盥を据え莫産を張った上で回す。海嬴は互いに強く弾け、弱いものは莫産の外に弾き出され負ける。浅草の空地や路地で遊んだ幼馴染もいつか一人二人商家の丁稚として奉公に出され抜けていった。人恋しさが漂いそこに生きる人々の哀切が滲みでている。

深川敏子

# 西ヶ原日記

(33)

鈴木榮子

密事めく首夏の若狭井口づくる  
街道の中の名<sup>な</sup>代<sup>だい</sup>の鯖街道  
若狭奈良通ずと信じざるをがせ  
葉のあらし新茶の滋味を賞味せり  
上野御徒町谷間で仰ぐ川開き

川開き客を一間に集めけり  
高麗屋夫人涼し子の子の初舞台  
五分進めのダイバーウオツチ時計夏期着用  
形代を年々納め郷社かな  
斑猫の案内と出づるは忝し  
空蟬の脱皮で見する背ナ返り  
枇杷の実の果実厚くて大き種

## 爺

堀内五齡

爺の里へ馴染みの径や合歡の花  
ちんまりと爺の家あり夏木立  
爺訪へば守宮総出で迎へけり  
無骨が味の爺の手作り粽かな  
羽脱鶏爺の尻追ふ俄か雨  
時なしの爺のはな唄燕の子  
家鴨一家も爺の家族や夏柳  
雲の峰流れに濯ぐ爺小さし  
岩魚膳に爺の山河の溢れけり  
爺に甘えし日々甦る蚩かな

# 秋を待つ

小菅礼子

いづれはと覚悟の手術青嵐  
術前の絶食告ぐるいなさかな  
香水や初の手術着・車椅子  
動くなてふ難行苦行若葉冷  
山法師眼帯とれて紅ほのか  
まぎれなく余生見通す清和かな  
禁令のひとつづつ解け髪洗ふ  
夏草の伸び見ぬふりを通しけり  
夏の雨まな蓋閉ぢてゐたりけり  
防塵眼鏡つけて動ける秋を待つ

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 向井 芳子

禅堂に僧の衣擦れ余花の冷え  
声明の五臓に沁みる麦の秋  
開山僧の修業の窟や滝の音  
瑠璃鳴くや山七色に畳なはる  
暁光やひたすらに座す夏行僧

○ 山川 好美

疎開地や知る人もなき桐の花  
夏蓬真昼の黙の魚市場  
篝火に宵を忘るる薪能  
額の花そこだけ眩し娘等の声  
鎌倉の古刹はるかに卯波立つ

○ 松波とよ子

○ 佐々木 新

御神体は若葉の山よ大鳥居  
神紋の穀かじの若葉に雨しとどど  
若葉雨十六本の御柱  
若葉雨下諏訪宿は坂の町  
母の日の謂れあれこれ華供ふ

○ 松波とよ子

陶匠の作務衣紫紺や走り梅雨  
烏瓜花はひと夜の生絹とぞ  
はたた神処々に雨傾く勢ひかな  
翡翠の川面飛來の離れ技  
滴りや薄目のままの摩崖仏

# 春燈の句

鈴木 榮子選

麦の秋十勝平野の黄絨毯

修験者も大音声や滝の音

新緑に音なき音や四万の雨

瞑目に青葉囁く露天風呂

目つむりて聴く禅林の老鶯

禅林の山門小振り花蜜柑

理髪店のサインポールや朧の夜

軽暖や満中陰の届きたる

源平の合戦の碑や夏椿

擦れ違ふ心さておき葛饅頭

作庭家生れし邸や濃紫陽花

一八に啄木の歌口遊ぶ

街薄暑人馬を癒す馬水槽

先達の石樋木樋や椎香る

千葉 島田 山流

大阪 中上 馥子

岡山 間野 暎子

東京 篠原 幸子

姫うつぎこぼる庭の石の肌

ジャコメツテイの手ささびなれやねぢれ花

海風を操る夏の鷗たち

植田風黒澤好みの仁王門

実の付きて雌株桐木滴れる

五月蘭薬師如来の泥鱗髭

警女おりんと来合はす若狭の竹の秋

藤懸る若狭へ馳せる一句会

黒蝶や紅殻格子の廓跡

着つくしても藍の色香や更衣

賜はりし歳時記を読む窓若葉

百千鳥吉報は先づ妣にかな

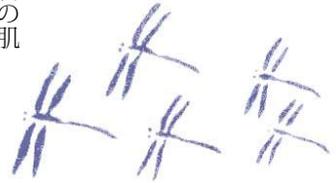
支へられてけふの我あり風薫る

包丁の手慣れの音や夏厨

京都 藤木 祥治

京都 岡井しげ女

埼玉 長谷 仁子



# 余言

鈴木 榮子

寄木細工の箱にしまへり蛇の衣 大谷満智子

寄木細工は関東では箱根の名産品である。樹木が多いからよい材料があるう。作る工程を見たが一本一本のこれと  
思う木を集めデザイン的に組合せてそれが完成したら、面  
として鉋で薄く一枚の文様に仕上げるのである。一文様の  
単位を幾何学的に組合せて一枚の紙のように仕上げる。そ  
れを張って寄木細工の函を作る。その函はもう一つ工夫が  
あってその文様の目にそって柀目を動かすと次々と柀がは  
ずれるが、十手で開くものから最高は五十六手のものがあ  
ったが、最近また増えたそうだ。もし次々と開けたとして  
も手が分らなくはならないかと思つた。

作者はその開閉至難の函に蛇の衣をしまったというのは

閉じ込めたということだ。誰にも簡単に開けられないので安心である。

金雀枝のなだれ黄金の雨ふらす 秋場 貞枝

エニシダはラテン語、スペイン語からの転訛したもので  
觀賞用植物、約一・五メートル位ある。金雀枝エニシダというエキ  
ゾチックな文字が詩情をそせる。

白秋の詩に、〈金雀枝の金と赤とが散るぞえな〜〉とい  
う詩があつたように思う。作者の受けた感じも、黄金の雨  
ふらす—であるから、金雀枝の雰囲気が感じられる句。

時の日の五分おくれてゐし時計 三代川玲子

作者は時の日の五分おくれの時計を詠っているが、五分  
遅れは訂正した方がよい。五分の差は大きい。私は家中の  
時計を五分進めている。この五分に随分と助けられ、心の  
余裕を得ている。正確がよいにきまつているが、五分とい  
うことの差で生む悲喜もあり、現代人は時間に縛られてい  
る。特にこの頃新幹線などはベルなしで発車するのでこの  
五分に助けられている。そういえば、今まで日本の発車ベ  
ルは随分大袈裟なものだつたと思う。(以下略)